

# 竺法護訳『正法華経』の〈龍女伝説〉

白 景皓

## 0 はじめに

『法華経』「提婆達多品」の後分をなす〈龍女伝説〉は、龍女の登場から龍女の示現まで、六部分からなる。〈龍女伝説〉に相当する漢訳を年代順に挙げれば以下のとおりである。

- 『薩曇分陀利経』(失訳、年代不詳)<sup>1</sup>
- 『正法華経』(竺法護訳、286 CE)
- 『妙法蓮華経』(法意訳、490 CE)<sup>2</sup>
- 『添品妙法蓮華経』(闍那崛多共笈多訳、601 CE)

本稿は竺法護訳『正法華経』以外の三本漢訳の成立について論じない。『法華経』サンスクリット原典の経題は *Saddharmapuṇḍarīka* であり、『薩曇分陀利経』はその音写である。『正法華経』の「正」は *sat*、「法」は *dharma*、「華」は *puṇḍarīka* に対応し、『妙法蓮華経』の「妙」は *sat*、「法」は *dharma*、「蓮華」は *puṇḍarīka* に対応している。また、『添品妙法蓮華経』は『妙法蓮華経』の増補本<sup>3</sup>である。

名訳とされた鳩摩羅什による〈龍女伝説〉未収録の『妙法蓮華経』の成立(406 CE)以前、竺法護はすでに西暦286年に『正法華経』全巻を訳出し、『法華経』及びその一乗思想を中国に将来した。竺法護訳『正法華経』は「古訳」、すなわち、仏教術語が未だ漢語化されず、難読の言葉や文句で訳された経典である。

『妙法蓮華経』に依拠する注釈や研究は数多くあるが、竺法護訳『正法華経』に関する国訳や現代語訳は全くの手付かずである。よって、本稿は、竺法護の生涯及び竺法護訳の特徴を明らかにするとともに、竺法護訳『正法華経』中の「提婆達多品」〈龍女伝説〉部<sup>4</sup>を取り上げ、書き下し文及び現代語訳を提示する。なお、参考までに、対応するサンスクリット原典とその松濤訳、『妙法蓮華経』(法意訳)及び新国訳『妙法蓮華経』を併せ提示することとする。

<sup>1</sup> 『薩曇分陀利経』には「失譯人名今附西晋録」(書き下し:「譯人の名を失い、今、『西晋録』に附す。»)とあり、同経は訳者の名前は失われたが、西晋の経録に記録されていると記されている。『薩曇分陀利経』は西晋時代(CE 265-316)に訳出されたと考えられることができる。

<sup>2</sup> 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経提婆達多品』の原型は「提婆達多品第十二」を欠く。法意は永明八年(490 CE)に『妙法蓮華経提婆達多品第十二』を訳出した。

『古今訳経図記』T55.363b25-29:「沙門達摩摩提。此云法意。西域人。(中略)以齊武帝永明八年歲次辛未。為沙門法獻於楊都瓦官寺。譯觀世音懺悔除罪咒經一卷。妙法蓮華経提婆達多品第十二一卷。」(書き下し:「沙門達摩摩提、此れ、「法意」と云ふ。西域人なり。(中略)齊武帝永明八年歳の次いで辛未に、沙門法獻の為に、楊都瓦官寺に於いて、觀世音懺悔除罪咒經一卷、妙法蓮華経提婆達多品第十二一卷を譯す。)

<sup>3</sup> 『添品妙法蓮華経』「序言」は増補改訂の次第について次のように述べている。T09.134c14-20:「遂共三藏崛多笈多二法師。於大興善寺。重勘天竺多羅葉本。富樓那及法師等二品之初。勘本猶闕。藥草喻品更益其半。提婆達多通入塔品。陀羅尼次神力之後。囑累還結其終。」(遂に三藏崛多と笈多の二法師と共に、大興善寺に於いて、重ねて天竺の多羅葉本<sup>かんが</sup>を勘へ、『富樓那』及び『法師』等二品の初めの勘本猶お闕く。『藥草喻品』に更に其の半を益す。『提婆達多』を『塔品』に通入す。『陀羅尼』を『神力』の後に次く。『囑累』を其の終わりに還えて結ぶ。)闍那崛多と笈多二法師は、『五百弟子受記品』(『富樓那』)及び『法師品』の冒頭を校訂し、『藥草喻品』にその後半を付加し、『提婆達多品』を『見宝塔品』(『塔品』)に編入し、『陀羅尼品』を『如来神力品』(『神力』)の後に移し、『囑累品』を経典の最終章に改めた。

<sup>4</sup> 『正法華経』には「提婆達多品」と題された章節がない。法意訳『妙法蓮華経提婆達多品第十二』に相当する竺法護訳『正法華経』「提婆達多品」は「梵志品」と題されている。『正法華経』の〈龍女伝説〉部はT09.105c28-106a22に相当する。

## 1 竺法護伝記

竺法護の人物像を竺法護についての伝記（『出三蔵記集』「竺法護伝」及び『高僧伝』「竺曇摩羅刹伝」<sup>5)</sup>）に基づいて概観する。

### 1.1 竺法護の出身

竺法護は、西域の月氏国に生まれ、元来の姓氏は「支」、八歳の時、出家した。師は竺高座である。

①竺法護其先月支人也。世居燉煌郡。年八歳出家。事外國沙門高座為師。<sup>[1]</sup>

②竺曇摩羅刹。此云法護。其先月支人。本姓支氏。世居燉煌郡。年八歳出家。事外國沙門竺高座為師。<sup>[2]</sup>

竺法護は師竺高座に仕えた後、姓氏を「竺」に改めたと推測される。

### 1.2 竺法護の漢語力

西域出身の竺法護の漢語力はいかばかりであったのか、このような疑問が起こる。『出三蔵記集』「竺法護伝」は、竺法護の漢語力について次のように記している。

是以博覽六經。涉獵百家之言。<sup>[3]</sup>

「六經」は『易』、『詩』、『書』、『春秋』、『礼』、『楽』の六經である。しかしながら、竺法護の時代に『楽經』はすでに散逸しており、「六經を博覽する」という記述は『出三蔵記集』の著者僧祐が竺法護を記述するために用いた定型文句に過ぎず、竺法護自身の漢語力を明らかにするものではない。しかしながら、この記述は、竺法護の高度な漢語力を賞賛するものに他ならない。

### 1.3 竺法護の外国語力

竺法護は、インド撰述經典の翻訳者である。『出三蔵記集』「竺法護伝」は竺法護の外国語力について次のように記している。

外國異言三十有六。書亦如之。護皆遍學。<sup>[4]</sup>

この記述によれば、竺法護は、三十六種の外国語及びそれぞれの書体を全部習得していたとされる。三十六種の外国語がいかなる外国語なのか不明ながら、当然サンスクリットが含まれていたと推定される。

[1] 『出三蔵記集』 T55.97c20-21：書き下し：「竺法護、其の先、月支の人なり。世、燉煌郡に居る。年八歳にして、出家す。外國の沙門の高座に事えて師と為る。」

[2] 『高僧伝』 T50.326c02-04：書き下し：「竺曇摩羅刹、此れ法護と云ふ。其の先、月支の人なり。本姓、支氏なり。世、燉煌郡に居る。年八歳にして、出家す。外國の沙門の竺高座に事えて師と為る。」

[3] 『出三蔵記集』 T50.326c05-06：書き下し：「是を以って、六經を博覽し、百家の言を涉獵す。」

[4] 『出三蔵記集』 T55.97c26-28：書き下し：「外國の異言、三十有六なり。書、亦た之れの如し。護、皆遍學す。」

<sup>5)</sup> 『高僧伝』「竺曇摩羅刹伝」は『出三蔵記集』「竺法護伝」に取材した部分が多く、最古の史料は『出三蔵記集』「竺法護伝」であると考えられる。

## 2 竺法護の『法華経』写本

竺法護がいかなる『法華経』サンスクリット写本を使用したのかについて『添品妙法蓮華経』「序言」は次のように述べている。

昔焮煌沙門竺法護。於晋武之世。譯正法華。後秦姚興。更請羅什。譯妙法蓮華。考驗二譯。定非一本。護似多羅之葉。什似龜茲之文。<sup>[5]</sup>

鳩摩羅什が使用した写本は龜茲国（現在の中国新疆ウイグル自治区の西部）近辺のものであり、竺法護が使用した写本は貝葉本（多羅之葉、Tāra）であるとされる。鳩摩羅什の『法華経』サンスクリット写本は中央アジア系統に属すると推定されるが、竺法護が使用した貝葉本がどの写本系統に属するのかは不明である。

## 3 竺法護の訳場

船山 [2014: 56] が述べているように、経典の漢訳はひとつの事業として行われた。『正法華経』も例外ではなく竺法護単独の訳業ではない。まずもって、『出三蔵記集』「竺法護伝」及び『高僧伝』「竺曇摩羅刹伝」は、竺法護の助訳者について次のように説明する。

- ①初護於西域得超日月明經胡本譯出。頗多繁重。時有信士聶承遠乃更詳正文偈刪為二卷。<sup>[6]</sup>  
 ②承遠有子・道真。亦善梵學。(中略) 又有竺法首、陳士倫、孫伯虎、虞世雅等。皆共承護旨執筆詳校。<sup>[7]</sup>

この記述によれば、竺法護の助訳者として、聶承遠・聶道真を始めとするサンスクリットに精通している仏教信者達がおり、彼らが竺法護の意趣をよく理解した上で翻訳を遂行したとされる。

『出三蔵記集』「正法華経記」に、竺法護の訳場（漢訳工房）における『正法華経』の訳出作業の役割分担に関する興味深い以下の記事がある。

太康七年八月十日。焮煌月支菩薩沙門法護。手執胡經口宣出正法華經二十七品。授優婆塞聶承遠張仕明張仲政共筆受。竺徳成竺文盛嚴威伯續文承趙叔初張文龍陳長玄等共勸助歡喜。九月二日訖。天竺沙門竺力龜茲居士帛元信。共參校。元年二月六日重覆。又元康元年。長安孫伯虎。以四月十五日寫素絹<sup>6</sup>。<sup>[8]</sup>

この記事によれば、役割分担は以下のとおりである。

<sup>[5]</sup>T09.134c02-04：書き下し：「昔、焮煌沙門竺法護、晋武の世に於いて、正法華を譯しき。後秦姚興、更に羅什を請し、妙法蓮華を譯しき。二譯を考驗し、定かに一本に非ず。護は多羅の葉に似、什は龜茲の文に似る。」

<sup>[6]</sup>『出三蔵記集』T55.98a23-25：書き下し：「初め護、西域に於いて『超日月明經』の胡本を得て譯出せしに、頗る繁重多し。時に信士聶承遠なるもの有りて、乃ち更に詳かに文偈を正し、刪して二卷と為せり。」

<sup>[7]</sup>『高僧伝』T50.327a05-07：書き下し：「承遠に子道真有り。亦た梵學に善し。(中略) 又た竺法首、陳士倫、孫伯虎、虞世雅等有り。皆共に護の旨を承け、執筆し、詳かに校せり。」

<sup>[8]</sup>『出三蔵記集』「正法華経記」T55.56c17-24：書き下し：「太康七年(286年)八月十日、焮煌月支菩薩・沙門法護、手、胡經を執り、口より正法華経二十七品を宣出す。優婆塞聶承遠、張仕明、張仲政に授けて共に筆受す。竺徳成、竺文盛、嚴威伯、續文承、趙叔初、張文龍、陳長玄等と共に、勸助して歡喜せしむ。九月二日、訖る。天竺沙門竺力、龜茲居士帛元信と共に參校す。元年(290年)二月六日、重ねて覆す。又た、元康元年(291年)、長安孫伯虎、以って、四月十五日、素絹に寫す。」

<sup>6</sup>河野 [2007: 112] によれば、「素解」は「素絹<sup>しろぎぬ</sup>」の誤りであると見られるので、「素絹」に改訂する。

1. 竺法護：サンスクリット原典の口述者（宣出）
2. 聶承遠、張仕明、張仲政：サンスクリット原典の口述を漢文で筆記する係者（筆受）
3. 竺徳成、竺文盛、嚴威伯、續文承、趙叔初、張文龍、陳長玄等：漢訳の補助者（勸助）
4. 竺力、帛元信：漢訳初稿の校訂・改訂者（參校、重覆）
5. 孫伯虎：漢訳の記述者（寫素絹）

#### 4 竺法護の訳風

『法苑珠林』「沙門于法蘭伝」において、于法蘭は竺法護の訳風を次のように評している。

於時經典新譯。梵語數多。辭句繁蕪。章偈不整。<sup>[9]</sup>

于法蘭によれば、竺法護の翻訳の言葉や文句は雑多であり、サンスクリット音写が残り、長行と偈文は整然としていないとされる。

また、『一切経音義』（慧琳撰）は竺法護訳について次のような評価を与えている。

西晋竺法護譯詞理虜拙。質朴不妙。<sup>[10]</sup>

慧琳によれば、竺法護訳は言葉が荒れて拙く（詞理虜拙）、素朴（質朴）であり、洗練されたものではない（不妙）。

鳩摩羅什もまた、同趣旨のことを述べている。『佛祖統記』（志磐撰）に次のようにある。

羅什翻法華經。以竺法護本云。天見人人見天。什曰。此言過質耳。叡曰。將非人天交接兩得相見。什喜遂用其文。<sup>[11]</sup>

鳩摩羅什が目したののは、竺法護本の「天見人人見天<sup>[12]</sup>」である。この一文は現行竺法護訳『正法華経』には見出されない。『正法華経』「授五百弟子決品第八」の「天上視世間。世間得見天上<sup>[13]</sup>」に相当する。対応するサンスクリット原典は以下のとおりである。

SP 202.3-4: devā api manuṣyān draṅṣyanti manuṣyā api devān draṅṣyanti |

神々も人間を見、人間も神々を見るようになろう。（翻訳は松濤等 [2001: 99] による）

鳩摩羅什は、竺法護訳は逐語訳に過ぎ、素朴過ぎると評する。そして彼は、彼の弟子僧叡の意訳「人天交接兩得相見<sup>[14]</sup>」を評価する。竺法護訳が五字と六字からなる文句であるのに対して、僧叡の意訳は四字と四字からなる文句であり、漢文としての韻律が整い、洗練された印象を与え

<sup>[9]</sup>『法苑珠林』「沙門于法蘭伝」T53.765a04-05：書き下し：「時に於いて、經典の新譯に梵語數多くあり、辭句繁蕪にして、章偈整らず。」

<sup>[10]</sup>『一切経音義』T54.427b03：書き下し：「西晋の竺法護譯、詞理虜拙なり。質朴にして妙れず。」

<sup>[11]</sup>『佛祖統記』T49.266b22-24：書き下し：「羅什、法華經を翻し、竺法護本の『天、人を見て、人、天を見る』と云わくを以って、什の曰わく。『此の言、過質のみなり。』叡の曰わく。まさに、『人、天と交接し、兩にして相見ることを得』に非らずや。什、喜んで遂に其の文を用いる。」

<sup>[12]</sup>書き下しは脚注 [11] を参照せよ。

<sup>[13]</sup>『正法華経』「授五百弟子決品第八」T09.95c28：書き下し：「天上、世間を視て、世間、天上を見ることを得。」

<sup>[14]</sup>『妙法蓮華経』「五百弟子受記品第八」T09.27c25：書き下し：「人、天と交接し、兩にして相見ることを得。」

る。また、「交接」、「相見」という訳語は教養人が読誦する漢文『禮記』、『文選』等<sup>[15]</sup>に見られる表現である点も見逃せない。

## 5 竺法護の訳経事業

竺法護は一生涯、訳経事業に努め、『賢劫経』、『大哀経』、『正法華経』及び『普曜経』を始めとする149部大・小乗経典を漢訳した。

所獲大小乗經。賢劫大哀法華普曜等凡一百四十九部。孜孜所務。唯以弘通為業。終身譯寫。勞不告倦。經法所以廣流中華者護之力也。<sup>[16]</sup>

149部という訳出量は、鳩摩羅什及び玄奘三蔵と比べても突出している。『開元録』は、鳩摩羅什及び玄奘三蔵の訳経数を次のように記録している。

沙門鳩摩羅什七十四部。三百八十四卷經律論集。<sup>[17]</sup>

沙門釋玄奘七十六部。一千三百四十七卷經律論記傳。<sup>[18]</sup>

これによれば、鳩摩羅什は74部経典、玄奘三蔵は76部経典を訳出しているが、竺法護の訳経数はそれぞれのほぼ倍に当たる。『出三蔵記集』は、「經法所以廣流中華者護之力也<sup>[19]</sup>」と述べ、竺法護のおかげで、仏教の経典は中国に広く伝えられたと彼の訳業を高く評価している。

## 6 竺法護訳の特徴と『正法華経』「提婆達多品」〈龍女伝説〉

河野[2007: 273-284]は、竺法護の代表訳としての『正法華経』、『維摩経』、『漸備一切智徳経』<sup>7</sup>、『如来興顕経』に基づいて、竺法護訳には以下のような特徴があることを指摘している。

- ① 同一経典内での同一語の訳し分け
- ② 四字句による構文
- ③ 類義語を重ねた二字の造語
- ④ 補填訳
- ⑤ 原テキストに対する意識語の一対一対応
- ⑥ 難解な教理部分の不翻訳

『正法華経』「提婆達多品」〈龍女伝説〉には、これらの六つの特徴のうちの四つの特徴が認められる。

<sup>[15]</sup>『禮記』「射郷食饗、所以正交接也。」(郷にて射りて、饗を食ひ、所以は正に交接すべきなり。)『文選』「行役在戰場、相見未有期」(役を行ひて戰場に在いて、相見るは未だ期有らず。)

<sup>[16]</sup>『出三蔵記集』T55.98a01-04:書き下し:「獲る所の大小乗の經は、『賢劫』、『大哀』、『法華』、『普曜』等、凡そ一百四十九部なり。孜孜として務むる所、唯だ弘通を以て業と為し、身を終わるまで譯寫し、<sup>しごと</sup>勞して倦むことを告げず。經法の中華に廣く流れたる所以は護の力なり。」

<sup>[17]</sup>『開元釋教録』T55.511c23:書き下し:「沙門鳩摩羅什に七十四部あり。三百八十四卷の經・律・論集なり。」

<sup>[18]</sup>『開元釋教録』T55.552c18:書き下し:「沙門釋玄奘に七十六部あり。一千三百四十七卷の經・律・論・記傳なり。」

<sup>[19]</sup>書き下しは脚注[16]を参照せよ。

<sup>7</sup>『華嚴経十住品』別行経

## 6.1 ①同一経典内での同一語の訳し分け

### (1) samyakṣambodhim abhisambuddhaḥ

「得仏」<sup>8</sup>、「成仏」<sup>9</sup>、「成正覺」<sup>10</sup>、「成最正覺」<sup>11</sup>

### (2) sarvasattva

「一切衆生類」<sup>12</sup>、「群生」<sup>13</sup>

### (3) bodhisattva

「菩薩」<sup>14</sup>、「大士」<sup>15</sup>

## 6.2 ②四字句による構文

竺法護は『正法華經』「提婆達多品」〈龍女伝説〉を四字句による構文によって構成している。以下、二例を挙げる。

在於海中 | 惟但敷演 | 正法華經 | <sup>16</sup>

積功累徳 | 精進不懈 | 歷劫難計 | 乃得佛道 | <sup>17</sup>

## 6.3 ③類義語を重ねた二字の造語

「惟但」(のみ)

「倉卒」(性急)

「弘廣」(廣大)

「聰明」(賢い)

「敷演」(=「敷傳」-「演説」(伝えて説示する))

「超異」(=「超越」-「相異」(超えて異なる))

「性行」(=「本性」-「所行」(本性と所行))

「志願」(=「志向」-「誓願」(志向と誓願))

「和雅」(=「和順」-「高雅」(和順でありかつ高雅))

「尊妙」(=「尊貴」-「美妙」(尊んで優れる))<sup>18</sup>

「敬侍」(=「敬礼」-「奉侍」(敬礼して仕える))

「戴仰」(=「推戴」-「景仰」(推戴して景仰する))

「宗奉」(=「宗仰」-「敬奉」(恭敬して奉る))<sup>19</sup>

「速疾」(速やか)<sup>20</sup>

「尋即」(すぐさま)<sup>21</sup>

<sup>8</sup>3.1 を参照せよ。

<sup>9</sup>3.1, 3.3, 3.6 を参照せよ。

<sup>10</sup>3.2 を参照せよ。

<sup>11</sup>3.5 を参照せよ。

<sup>12</sup>3.3 を参照せよ。

<sup>13</sup>3.3 を参照せよ。

<sup>14</sup>3.2 を参照せよ。

<sup>15</sup>3.4 を参照せよ。

<sup>16</sup>3.1 を参照せよ。

<sup>17</sup>3.2 を参照せよ。

#### 6.4 ④補填訳

一例のみが見られる。

SP 265.6-8: atha dakṣiṇasyāṃ diśi vimalā nāma lokadhātus tatra saptaratnamaye bodhivṛkṣamūle niṣaṅgaṃ abhisambuddham ātmānaṃ saṃdarśayati sma dvātriṃśallakṣaṇadharaṃ sarvānuvyañjana-rūpaṃ prabhayā ca daśadīśaṃ sphuritvā dharmadeśanāṃ kurvāṇam |<sup>22</sup>

それから、南の方角にある「塵がない」(無垢)という世界において、七宝からなる菩提樹の根もとに坐って、自分がさとりをひらき、三十二の相をそなえ、すべての(八十の)随好をそなえ、光明をもって十方を照らし出し、教えを説いているさまをあらわしてみせた。(松濤等訳)

『正法華経』(竺法護訳): 尋即成佛。相三十二衆好具足。國土名號衆會皆見。怪未曾有。<sup>[20]</sup>

内容的には、「國土名號衆會皆見」までで、サンスクリット原典との対応は終わっている。しかし竺法護は、「怪未曾有」という文句を補填して訳を提示している。龍女成仏が不可思議であることを強調したいという竺法護自身の意図が窺える。

#### 6.5 倒置法

河野 2007 が指摘しない特徴として倒置法の多用も『正法華経』『提婆達多品』〈龍女伝説〉に指摘できる。

「歴劫難計」(「劫を歴すること、計り難し」)(=「歴難計劫」(計り難き劫を歴す))<sup>23</sup>

「佛不可得」(「佛をば、得べからず」)(=「不可得佛」(佛を、得べからず))<sup>24</sup>

「功積顯著」(「功をば積むこと、顯著なり」)(=「顯著積功」(顯著にして功を積む))<sup>25</sup>

「一如意珠價當是世」(「一の如意珠の價、是の世に當す」)(=「價當是世一如意珠」(價、是の世に當する一の如意珠))<sup>26</sup>

「國土名號衆會皆見」(「國土や名號をば、衆會皆、見る」)(=「衆會皆見國土名號」(衆會皆、國土や名號を見る))<sup>27</sup>

### 7 竺法護訳『正法華経』〈龍女伝説〉の翻訳研究

本節は、『法華経』『提婆達多品』〈龍女伝説〉のサンスクリット原典、松濤の和訳、『妙法蓮華経』(法意識)及び新国訳『妙法蓮華経』と共に、『正法華経』(竺法護訳)の原文・書き下し・現代語訳を提示する。

<sup>[20]</sup>T09.106a23-24: 書き下し:「尋即<sup>じんそく</sup>に、佛と成る。相三十二にして、衆好<sup>しゅうこう</sup>を具足<sup>ぐそく</sup>し、衆會<sup>しゅうえ</sup>皆、國土や名號<sup>みょうごう</sup>を見て、怪<sup>あや</sup>しく未だ<sup>かつ</sup>曾て有らず。」

<sup>22</sup>3.6 を参照せよ。

<sup>23</sup>3.2 を参照せよ。

<sup>24</sup>3.4 を参照せよ。

<sup>25</sup>3.4 を参照せよ。

<sup>26</sup>3.5 を参照せよ。

<sup>27</sup>3.6 を参照せよ

## 7.1 龍女の登場

SP 262.10-263.8: mañjuśrīr āha | samudramadhye saddharmapuṇḍarīkaṃ sūtraṃ bhāṣitavān na cānyat | prajñākūṭa āha | idaṃ sūtraṃ gambhīraṃ sūkṣmaṃ durdṛṣaṃ na cānena sūtreṇa kiṃcid anyat sūtraṃ samam asti | asti kaścit sattvo ya idaṃ sūtraratnaṃ satkuryād avaboddhum anuttarāṃ samyaksambodhim abhisamboddhum | mañjuśrīr āha | asti kulaputra sāgarasya nāgarājño duhitāṣṭavarṣā jātyā mahāprajñā tūkṣṇendriyā jñānapūrvamgamena kāyavānmanaskarmaṇā samanvāgatā sarvatathāgatabhāṣitavyañjanārthodgrahaṇe dhāraṇīpratīlabdhā sarvadharmasattvasamādhānasamādhisahasraikakṣaṇapratīlābhinī | bodhicittāvinivartinī vistīrṇapraṇidhānā sarvasattveṣv ātmapremānugatā guṇotpādane ca samarthā na ca tebhyaḥ parihīyate | smitamukhī paramayā śubhavarṇapuṣkaratayā samanvāgatā maitracittā karuṇāṃ ca vācam bhāṣate | sā samyaksambodhim abhisamboddhum samarthā |

松濤 [48.4-49.3]

マンジュシュリーは答えた。

「私が大海のまんなかで説いたのは、ほかならぬ『正しい教えの白蓮』という經典です」

智積（菩薩）は言った。

「その經典は非常に深遠にして玄妙な、見きわめがたいもので、他の經典でこの經典と対等のものは何一つありません。（それゆえ、）この經典の宝玉を会得し、この上ない正しい菩提をさとることのできる衆生がだれかいるのですか」

マンジュシュリーは答えた。

「良家の子よ、いるのです。サーガラ龍王の娘で当年にとって八歳なのですが、知恵にすぐれ、鋭敏な能力をそなえ、彼女の身体、口、心の行いは知によって導かれ、すべての如来の説かれたことばと（その）意味を理解するためのダーラニー（陀羅尼）を得ており、すべてのあらゆるものや（あらゆる）衆生に精神を集中する幾千もの三昧を一瞬のうちに獲得し、菩提への心を（起こして）退転することなく、広大な誓願を保ち、あらゆる衆生に対して自己自身にいただくような愛情をいただき、さらに、功德を發揮することができ、しかも、それら（功德）が欠けているということはありません。顔には微笑を浮かべ、（身体は）最高のすぐれた清浄な色をそなえ、慈しみの心の持ち主で、慈愛深いことばを語るのです。彼女は正しい菩提をさとることができます。」

『妙法蓮華經』（法意識）<sup>[21]</sup>

文殊師利言。我於海中唯常宣說妙法華經。智積問文殊師利言。此經甚深微妙。諸經中寶世所希有。頗有衆生勤加精進修行此經速得佛不。文殊師利言。有娑竭羅龍王女。年始八歲。智慧利根善知衆生諸根行業。得陀羅尼。諸佛所說甚深祕藏悉能受持。深入禪定了達諸法。於剎那頃發菩提心。得不退轉辯才無礙。慈念衆生猶如赤子。功德具足心念口演。微妙廣大慈悲仁讓。志意和雅能至菩提。

新国訳『妙法蓮華經』

文殊師利の言わく、「我れ海中に於いて、唯だ常に妙法華經を宣説す。」智積、文殊師利に問いて言わく、「此の經は甚深微妙にして諸經の中の寶、世に希有なる所なり。頗し衆生の勤加精進し、此の經を修行して、速やかに佛を得るもの有りや不<sup>いな</sup>や。」文殊師利の言わく、「有り。娑竭羅龍王の<sup>むすめ</sup>女。年始めて八歳なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の所説の甚深の祕藏、悉く能く受持し、深く禪定に入りて諸法を了達し、剎那の頃<sup>せつな あいだ</sup>に於いて、菩提心を發し、不退轉を得たり。辯才無礙にして、衆生を慈念すること、猶お赤子の如し。功德具足し、心に念い口に演ぶること、微妙廣大なり。慈悲仁讓、志意<sup>わげ</sup>和雅、能く菩提に至れり。

<sup>[21]</sup>T09.35b12-21



『正法華経』(竺法護訳) [22]

溥首答曰 [23]。在於海中惟但敷演正法華経 [24]。智積又問。其法甚深尊妙難及 [25]。能有尋時得佛者乎 [26]。溥首答曰。龍王有女厥年八歳 [27]。聰明智慧與衆超異 [28]。發大道意 [29]。志願弘廣。性行和雅而不倉卒 [30]。便可成佛。

【書き下し】

溥首答へて曰はく。「海の中に在いて、惟但、『正法華経』を敷演するのみ。」智積、又た問ふ。「其の法甚だ深く、尊妙にして、及難し。能く尋時に佛を得る者有るや。」溥首、答へて曰はく。「龍王に女有り。厥の年、八歳なり。聰明智慧にして、衆を超異す。大道意を發こし、志願弘廣なり。性行和雅にして、倉卒せずして、便ちに成佛すべし。」

【現代語訳】

文殊菩薩は、「私は海の中において、『正法華経』のみ説示する」と答えた。そして、智積菩薩は、「その教えは奥深く、尊くてかつ優れ、得難い。間も無く仏果を証得する者がいるか」と問った。文殊菩薩は答えた。「龍王には娘がいる。彼女の年は八歳であり、賢く、智慧が満ち、他の衆生を超え、他の衆生と異なる。彼女は菩提心を起こし、志向と誓願が広大である。彼女の本性と所行は和順・高雅であり、性急ではない。彼女は成仏することができる」と。

## 7.2 智積菩薩の疑惑

SP 263.8-13: prajñākuṭo bodhisattva āha | dr̥ṣṭo mayā bhagavāñ śākyamunis tathāgato bodhāya ghaṭamāno bodhisattvabhūto 'nekāni puṇyāni kṛtavān anekāni ca kalpasahasrāṇi na kadācid vīryaṃ sraṃsitavān | trisāhasramahāsahasrāyāṃ lokadhātau nāsti kaścīd antaśaḥ sarṣapamātro 'pi pṛthivīpradeśo yatrānena śarīraṃ na nikṣiptaṃ sattvahitahetoḥ | paścād bodhim abhisambuddhaḥ | ka evaṃ śraddadhyaḍ yad anayā śākyam muhūrtenānuttarāṃ samyaksaṃboddhim abhisamboddhum ||

松濤 [49.3-11]

智積菩薩は言った。

「私は拝見したのですが、世尊のシャーキヤ・ムニ如来は、(まだ) 菩薩として菩提を求めて励んでおられたとき、多くの福德を積まれ、幾千もの多くの劫のあいだ、一度たりとも精進努力をな おざりにされたことはありませんでした。この(如来)が衆生の幸福のために身を投じなかった 地面は、三千大千世界のなかにほんの芥子粒ほどさえもないのです。そのあとで『さとり』をさ とられたのです。(ですから、) この(娘)が一瞬のうちにこの上ない正しい『さとり』をさ とることができるというようなことを、(いったい、) だれが信じるでしょうか。」

[22] T09.105c28-106a03

[23] 『一切経音義』(慧琳撰)は、「溥首」について次のような説明を与えている。T54.0521a14:「溥首為梵音、以晋音翻。今唐言翻為妙吉祥」「溥首」を梵音と為し、晋音を以て翻す。今の唐言、妙吉祥と為して翻す)「溥首」は竺法護の時代の発音(晋音)による mañjuśrī (文殊)の音写である。

[24] 「惟但」の「但」は不読文字である。「敷」は、『康熙字典』「經典相承、作敷」によれば、「經典を伝える」という意味である。「敷演」とは「經典を伝えて演説する」という意味である。

[25] 「及」は、『説文解字』「逮也」によれば、「得る」という意味なので、「える」と訓む。

[26] 『國語辞典』によれば、「尋時」は「即時」に通じ、「ただちに」の意味である。

[27] 「厥」は、『爾雅注疏・釋言』「厥、其也」によれば、「その」と訓み、龍女のことを指す。

[28] 「超異」は「超越」と「相異」の複合語である。

[29] 「大道意」は「大道(=仏果)への意(=心)」という意味であり、「菩提心」の古訳である。

[30] 「性行」は「本性」と「所行」の複合語である。「和雅」は「和順」と「高雅」の複合語である。『國語辞典』によれば、「倉卒」は「倉促」に通じる。「性急」という意味である。

『妙法蓮華經』（法意識）<sup>[31]</sup>

智積菩薩言。我見釋迦如來。於無量劫難行苦行。積功累徳求菩提道。未曾止息。觀三千大千世界。乃至無有如芥子許非是菩薩捨身命處。爲衆生故。然後乃得成菩提道。不信此女於須臾頃便成正覺。新国訳『妙法蓮華經』

智積菩薩の言わく、「我れ釋迦如來を見たてまつるに、無量劫に於いて、難行苦行し、功を積み徳を累ねて、菩提の道を求むること、未だ曾つて止息したまわず。三千大千世界を觀るに、乃至芥子の如き許も、是れ菩薩にして身命を捨てたもう處に非ざること有ること無し。衆生の爲めの故なり。然して後ちに、乃ち菩提の道を成ずることを得たまえり。此の女の須臾の頃あいだに於いて、便すなわち正覺を成ずることを信ぜず。」

『正法華經』（竺法護訳）<sup>[32]</sup>

智積又問。我觀能仁<sup>[33]</sup>。是仁大師<sup>[34]</sup>。本求佛道爲菩薩時。積功累徳精進不懈。歷劫難計乃得佛道<sup>[35]</sup>。不信此女便成正覺。

【書き下し】

智積、又た問ふ。「我れ能仁のうにんを觀る。是の仁大師にんだいし、本もともと、佛道を求め、菩薩と爲る時、功を積み、徳を累ね、精進して懈せず。計り難き劫をば歴し、乃ち佛道を得る。此の女、便ただちに正覺を成ずることを信ぜず。」

【現代語訳】

智積菩薩はまた問うた。「私は釈迦如來を見た。この釈迦如來世尊はかつて仏果を求め、菩薩となった時、功德を積み重ね、精進努力し、懈怠したことがない。量りきれない幾劫を経たのち、仏果を証得した。この娘が正等覺（＝仏）となることを信じない」と。

### 7.3 龍女の讚歌

SP 263.13-264.6:

atha khalu tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitāgrataḥ sthitā saṃdr̥ṣyate sma | sā bhagavataḥ pādau śirasābhivandyaikānte 'sthāt tasyāṃ velāyāṃ imā gāthā abhāṣata ||

puṇyaṃ puṇyaṃ gambhīraṃ ca

dīśaḥ sphurati sarvaśaḥ |

sūkṣmaṃ śarīraṃ dvātriṃśal-

lakṣaṇaiḥ samalaṃkṛtam ||49||

anuvyajāñanayuktaṃ ca

sarvasattvanamaskṛtam |

sarvasattvābhigamyam

antarāpaṇavad yathā ||50||

yathecchayā me saṃbodhiḥ

sākṣī me 'tra tathāgataḥ ||51||

<sup>[31]</sup>T09.35b21-26

<sup>[32]</sup>T09.106a03-06

<sup>[33]</sup>「能仁」は「能仁寂黙」の略語であり、「釈迦牟尼」の意識である。『説文解字』「觀、古文從見」（「觀」は、古文の「見」に従う）によれば、「觀」は「見る」の意味である。

<sup>[34]</sup>「仁」は「能仁」の略語である。釈迦如來のことを指す。「大師」は「世尊」の古訳である

<sup>[35]</sup>「歴劫難計」は「歴難計劫」の倒置である。

松濤 [49.11-50.3]

すると、そのとき、サーガラ龍女の娘が面前に立ちあらわれるのが見られた。彼女は世尊の両足を頭にいただいて礼拝したうえで、一方に立った。それから、次のような詩頌を述べた。

(如来の) 福德、(その) 深遠な福德がいたるところ (十) 方に満ちあふれ、(その) 精妙なる身体は三十二の相をもって美しく飾られ、〔四九〕

(八十の) 随好をもそなえ、あらゆる衆生によって崇拜され、ちょうど町の市場のように、あらゆる衆生がたずねていこうとする。〔五〇〕

(その) 如来こそが、私が欲するがままに菩提を得ることについての、私の証人なのです。私は(人々を) 苦しみから解き放してくれる広大な教を説きましょう。〔五一〕

『妙法蓮華経』(法意識) [36]

言論未訖。時龍王女忽現於前。頭面禮敬却住一面。以偈讚曰。

深達罪福相 遍照於十方

微妙淨法身 具相三十二 (四十九)

以八十種好 用莊嚴法身

天人所戴仰 龍神咸恭敬

一切衆生類 無不宗奉者 (五十)

又聞成菩提 唯佛當證知

我闡大乘教 度脱苦衆生 (五十一)

新国訳『妙法蓮華経』

言論未だ訖らざるに、時に龍王の女、<sup>たちま</sup>忽ち前に現じて、頭面に禮敬し、却きて一面に住して、偈を以て讚めて曰さく、

「深く罪福の相を達して 遍ねく十方を照らしたもう

微妙の淨き法身に 相を具すること三十二 (四十九)

八十種好を以て 用いて法身を莊嚴せり

天人の<sup>たいごう</sup>戴仰する所 龍神も<sup>ことごと</sup>咸く恭敬す

一切衆生の類に 宗奉せざる者無し (五十)

又た聞きて菩提を成ずること 唯だ佛のみ當に證知したもうべし

我れ大乘の教を闡きて、苦の衆生を<sup>ひら</sup>度脱せん (五十一)」

『正法華経』(竺法護訳) [37]

言語未竟女忽然現。稽首作禮繞佛三匝。却住讚曰。

功祚殊妙達 現相三十二 (四十九) [38]

諸天所敬侍 神龍皆戴仰 [39]

一切衆生類 莫不宗奉者 [40] (五十)

今我欲成佛 說法救群生 (五十一)

【書き下し】

言ひて語る事未だ竟らずして、女、<sup>おわ</sup>忽然に現る。稽首して作禮し、佛を三匝繞る。却きて住し、讚へて<sup>のたま</sup>曰わく。

[36] T09.35b26-35c05

[37] T09.106a06-11

[38] 『國語辞典』「祚、福德」によれば、「功祚」とは「功德」という意味である。

[39] 「戴仰」は「推戴」と「景仰」の複合語である。

[40] 「宗奉」は「宗仰」と「敬奉」の複合語である

「功祚<sup>くぞ</sup>、殊<sup>こと</sup>に妙<sup>た</sup>えなるに達し 相の三十二を現わす（四十九）  
 諸天<sup>けいじ</sup>の敬侍する所なり 神や龍、皆戴<sup>たいおう</sup>仰したまふ  
 一切衆生の類 宗奉<sup>そうほう</sup>せざる者莫<sup>な</sup>し（五十）  
 今我れ成佛し 法を説きて群生<sup>ぐんじょう</sup>を救わんと欲す（五十一）」

#### 【現代語訳】

〔その二人の対話が〕未だ終わらない時、龍女は突然に出現した。頭をいただき、敬礼し、仏を三回廻った。退いて立ち、〔仏のことを〕讃えた。

あなたの功德は殊に優れている。三十二相を現わす。（四十九）

神々はあなたに敬礼し、奉侍する。神々や龍はみな、あなたを推戴し、景仰する。全ての衆生達は、あなたを尊崇し、恭敬する。（五十）

今、私は成佛し、教えを教示し、衆生達を救おうと願う。（五十一）

## 7.4 舍利弗の論難

SP 264.6-13: atha khalu tasyāṃ velāyāṃ āyuṣmāñ śāriputras tāṃ sāgaranāgarājaduhitaram etad avocāt | kevalaṃ kulaputri bodhāya cittam utpannam avivartyāprameyaprajñā cāsi samyaksambuddhatvaṃ tu durlabham | asti kulaputri strī na ca vīryaṃ sraṃsayaty anekāni ca kalpaśātāny anekāni ca kalpasahasrāṇi puṇyāni karoti śaṭpāramitāḥ paripūrayati na cādyāpi buddhatvaṃ prāpnoti | kiṃ kāraṇaṃ | pañcasthānāni stry adyāpi na prāpnoti | katamāni pañca | prathamam brahmasthānaṃ dvitīyaṃ śakrasthānaṃ tṛtīyaṃ mahārājasthānaṃ caturthaṃ cakravartisthānaṃ pañcamam avāivartikabodhisattvasthānaṃ ||

松濤 [50.4-13]

そこで、そのとき、尊者シャーリプトラ（舍利弗）はそのサーガラ龍女の娘にこう言った。

「良家の娘よ、あなたが菩提に向かって心を起こし、退転することもなく、量り知れぬ知恵をそなえていても、それだけのことで、正しい菩提を得たものの位は得がたいのです。良家の娘よ、実に、女性のばあい、精進努力をおろそかにしないで、百もの多くの劫、（いや）千もの多くの劫のあいだ、いろいろな福德を積み、六種の完成を成し遂げたとしても、いまにいたるまで仏陀の位を得た人はいないのです。どうしてかといえば、いままでに女性は（次の）五つの位に（さえも）到達したことはないからです。五つとは何かといえば、まず第一はブラフマー神（梵天王）の位、第二はシャクラ（帝釈）の位、第三は大王の位、第四は転輪（王）の位、第五は不退転の菩薩の位です。」

『妙法蓮華経』（法意識）<sup>[41]</sup>

時舍利弗語龍女言。汝謂不久得無上道。是事難信。所以者何。女身垢穢非是法器。云何能得無上菩提。佛道懸曠經無量劫。勤苦積行具修諸度。然後乃成。又女人身猶有五障。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身。云何女身速得成佛。

新国訳『妙法蓮華経』

時に舍利弗、龍女に語りて言わく、「汝、久しからずして無上道を得たりと謂えり。是の事信じ難し。所以は何ん、女身は垢穢にして是れ法器に非ず。云何んぞ能く無上菩提を得ん。佛道は懸曠なり。無量劫を経て勤苦して行を積み、具に諸度を修して、然して後に乃ち成ず。又た女人の身には猶お五障有り。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何んぞ女身にして速やかに成佛することを得ん。

<sup>[41]</sup>T09.35c06-12

『正法華経』(竺法護訳) [42]

時舍利弗即謂女言。汝雖發意有無極慧 [43]。佛不可得。又如女身 [44]。累劫精進功積顯著 [45]。尚不得佛。所以者何。以女人身未階五位。一曰天帝。二曰梵天。三曰天魔。四曰轉輪聖王。五曰大士 [46]。

【書き下し】

時、舍利弗、即ち女に謂ひて言わく。「汝、意<sup>こころ</sup>を發し、無極慧<sup>むごくえ</sup>有ると雖も、佛を得べからず。又た如<sup>たと</sup>えば、女身<sup>にょしん</sup>にして、劫<sup>かさ</sup>を累ね、精進<sup>けんちん</sup>して、功<sup>こう</sup>を積み、尚お佛を得ず。所以は何ん。女人身<sup>にょじん</sup>を以て未だ五位<sup>ごい</sup>に階せず。一は、天帝<sup>てんてい</sup>なり。二は、梵天<sup>ぼんてん</sup>なり。三は、天魔<sup>てんま</sup>なり。四は、轉輪聖王<sup>てんりんせいおう</sup>なり。五は、大士<sup>だいし</sup>なり。」

【現代語訳】

そのとき、舍利弗は龍女に言う。「あなたは〔菩提〕心を起こし、量ることができないほどの智慧を具えたとしても、仏果を証得することができない。また、例えば、女人の場合、劫を積み、精進努力し、著しく功德を積み重ねたとしても、なお仏果を証得することができない。何故かといえば、女身のせいで、未だ五つの位に到達していない。一は、天帝の位である。二は、梵天の位である。三は、天魔の位である。四は、轉輪聖王の位である。五は、菩薩大士の位である」と。

## 7.5 龍女の献珠

SP 264.14-265.3: atha khalu tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitur eko maṇiḥ asti yaḥ kṛtsnāṃ trisāhasrāṃ mahāsāhasrāṃ lokadhātuṃ mūlyāṃ kṣamate | sa ca maṇis tayā sāgaranāgarājaduhitrā bhagavate dattaḥ | sa bhagavatā cānukampām upādāya pratigrhītaḥ | atha sāgaranāgarājaduhitā prajñkūṭaṃ bodhisattvaṃ sthaviraṃ ca śāriputraṃ etad avocat | yo 'yaṃ maṇiḥ mayā bhagavato dattaḥ sa ca bhagavatā śīghraṃ pratigrhīto neti | sthavira āha | tvayā ca śīghraṃ datto bhagavatā ca śīghraṃ pratigrhītaḥ | sāgaranāgarājaduhitāha | yady ahaṃ bhadanta śāriputra maharddhikī syām śīghrataraṃ samyaksambodhim abhisambudhyeyam | na cāsya maṇeḥ pratigrāhakaḥ syāt ||

松濤 [50.14-51.10]

ところで、そのとき、サーガラ龍王の娘は、その値が三千大千世界全体に値する宝珠を一つもっていた。その宝珠をか龍王の娘が世尊にお贈りすると、世尊は慈しみを示して、それをうけとられた。

そこで、サーガラ龍王の娘は、智積菩薩とシャーリプトラ長老とにこう質問した。

「私が世尊にささげたこの宝珠を、世尊は速やかにお納めくださいましたでしょうか、くださらなかったでしょうか」

長老は答えた。

「あなたも速やかにさしあげたし、世尊も速やかにおうけとりになりました」

サーガラ龍王の娘は語った。

「(その速やかさよりも、) 大徳シャーリプトラよ、私が正しい菩提をさとるのは、もっと速やかなのです。もし私が大神通の持ち主となったならば、この宝珠をうけとられたかたよりも(もっと速やかなの)です。」

[42] T09.106a11-16

[43] 『正法華経詞典』(辛嶋編)によれば、「無極慧」の原語は *aprameyaprajña* と推定される。

[44] 『國語辞典』「如、例也」によれば、「如」は「たとえば」と訓む。『國語辞典』によれば、「女身」は「女子」を意味する。

[45] 「功積顯著」は「顯著積功」の倒置である。

[46] 「天帝」は *mahārāja* に対応していない。「大士」は *bodhisattva* (菩薩) の古訳である。

『妙法蓮華經』（法意識）<sup>[47]</sup>

爾時龍女有一寶珠。價直三千大千世界。持以上佛。佛即受之。龍女謂智積菩薩尊者舍利弗言。我獻寶珠世尊納受。是事疾不。答言甚疾。女言。以汝神力觀我成佛。復速於此。

新国訳『妙法蓮華經』

爾の時に龍女に一の寶珠有り、價直三千大千世界なり。持以て佛に上つる。佛即ち之れを受けたまふ。龍女、智積菩薩と尊者舍利弗に謂いて言わく、「我れ寶珠を獻つる。世尊の納受、是の事疾しや不や。」答えて言わく、「甚だ疾し。」女の言わく、「汝が神力を以て、我が成佛を觀よ。復た此れよりも速やかならん。」

『正法華經』（竺法護訳）<sup>[48]</sup>

其女即以一如意珠價當是世<sup>[49]</sup>。時孚供上佛<sup>[50]</sup>。佛輒受之。女謂舍利弗及智積曰。吾以此珠供上世尊。佛授疾不<sup>[51]</sup>。答曰。俱疾。女曰。今我取無上正眞道成最正覺。速疾於斯<sup>[52]</sup>。

【書き下し】

其の女、即ち、價是の世に當する一の如意珠を以て、時に孚きて佛に供上す。佛、輒ち之れを受けたまふ。女、舍利弗及び智積に謂ひて曰はく。「吾、此の珠を以て世尊に供上すること、佛、授くこと、疾しや不や。」答へて曰はく、「俱に疾し。」女の曰はく。「今、我、無上正眞道を取り、最正覺を成ずること、斯よりも速疾なり。」

【現代語訳】

その娘は、そのとき、価値がこの世間に値する一つの如意珠を抱いて仏に献上し、仏はただちにこれ（＝如意珠）を受け取った。龍女は舍利弗及び智積菩薩に言った。「私は速やかにこの如意珠を世尊に献上したか、仏は〔それを〕速やかに受け取ったか」と。「速やかに献上し、速やかに受け取った」と答えた。龍女は、「今私が無上正等覚を証得し、正等覚（＝仏）となるのは、このこと（＝龍女が世尊に宝珠を献上し、世尊が宝珠を受け取ったこと）よりさらに速やかである」と言った。

## 7.6 龍女の示現

SP 265.3-10: atha tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitā sarvalokapratyakṣaṃ sthavirusya ca śāriputrasya pratyakṣaṃ tat strīndriyam antarhitam puruṣendriyam ca prādurbhūtaṃ saṃdarśayati | tasyāṃ velāyāṃ dakṣiṇāṃ diśaṃ prakrāntaḥ | atha dakṣiṇasyāṃ diśi vimalā nāma lokadhātus tatra saptaratnamaye bodhivṛkṣamūle niṣaṇṇaṃ abhisambuddham ātmānaṃ saṃdarśayati sma dvātriṃśallakṣaṇadharaṃ sarvānuyāñjanarūpaṃ prabhayā ca daśadīśaṃ sphuritvā dharmadeśanāṃ kurvāṇam |

松濤 [51.11-52.9]

それから、そのとき、サーガウ龍女の娘は、すべての世間の人々の環視するなかで、シャーリプ

<sup>[47]</sup>T09.35c12-16

<sup>[48]</sup>T09.106a16-20

<sup>[49]</sup>『説文解字注』「凡相持相抵皆曰當」（凡そ「相い持つ」、「相い抵る」皆「當」と曰く。）によれば、「値する」を意味する。

<sup>[50]</sup>『説文解字注』「伏孚曰抱」（「伏す」、「孚す」とは「抱く」と曰く。）によれば、「如意珠を抱く」という意味である。

<sup>[51]</sup>『説文解字』「授、從受」（「授る」とは「受く」に従う）によれば、「授」は「受」に通じるので、「授ける」という意味である。

<sup>[52]</sup>『爾雅注疏・釋詁』「斯、此也。」（「斯」とは、此なり）によれば、「此」は「このこと」という意味である。龍女が世尊に宝珠を献上し、世尊が宝珠を受け取ったことを指す。

トラ長老の見ていたる面前で、その女性の器官が消滅し、男性の器官が出現して、自分が菩薩であることをあらわして見せ、そのとき南の方角に進んでいった。それから、南の方角にある「塵がない」(無垢)という世界において、七宝からなる菩提樹の根もとに坐って、自分がさとりをひらき、三十二の相をそなえ、すべての(八十の)随好をそなえ、光明をもって十方を照らし出し、教えを説いているさまをあらわしてみせた。

『妙法蓮華経』(法意識) [53]

當時衆會皆見龍女。忽然之間變成男子。具菩薩行。即往南方無垢世界。坐寶蓮華成等正覺。三十二相八十種好。普爲十方一切衆生演說妙法。

新国訳『妙法蓮華経』

當時の衆會、皆、龍女の<sup>こつねん</sup>忽然の間に<sup>なんし</sup>變じて男子と成りて、菩薩の行を具して、即ち南方無垢世界に往き、寶蓮華に坐して等正覺を成じ、三十二相、八十種好ありて、普ねく十方の一切衆生の爲めに妙法を演説するを見る。

『正法華経』(竺法護訳) [54]

於斯變成男子菩薩。尋即成佛<sup>[55]</sup>。相三十二衆好具足。國土名號衆會皆見。怪未曾有。

【書き下し】

こ<sup>こ</sup>斯に於いて、變じて男子の菩薩と成りて、<sup>じんそく</sup>尋即到、佛と成る。相三十二、衆好を具足し、衆會皆、<sup>みょうごう</sup>國土や名號を見て、<sup>あや</sup>怪しく<sup>かつ</sup>未だ曾て有らず。

【現代語訳】

ここにおいて、龍女は変身し、男子の菩薩となり、ただちに仏となった。三十二相、〔八十種の〕随好を具えた。衆會はみな、〔龍女の〕國土や國土の名号を見て、奇怪なこと、今まで一度もなかったと考えた。

## 参考文献・略号

SP: Saddharmapuṇḍarīka: Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio eds., *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica 10. St. Pétersbourg, 1908-1912. Reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.

T: 『大正新脩大藏経』

### (1) 一次資料

- 郭璞〔西漢〕  
2011 『爾雅注疏』上海古籍出版社  
許慎〔西漢〕  
2016 『説文解字』浙江古籍出版社  
段玉裁〔東漢〕  
2005 『説文解字注標點本(附索引)』藝文印書館  
張玉書等〔清〕  
2014 『康熙字典』上海書店出版社

### (2) 二次資料

- Kern, Hendrik  
1884 *The Sutra of the Lotus Flower of the Wonderful Law*. Repr. New York: Dover, 1963.

[53] T09.35c16-19

[54] T09.106a23-24

[55] 『國語辞典』によれば、「尋即」は「不久」(久しからず)に通じ、「すぐさま」の意味である。

- 多田孝正・多田孝文  
1997 『新国訳大蔵経 法華経 下・観普賢菩薩行法経』大蔵出版
- 河野訓  
2007 『初期漢訳仏典の研究—竺法護を中心として—』皇学館大学出版部
- 辛嶋静志  
2001 『正法華経詞典』創価大学・国際仏教学高等研究所出版
- 中華民国教育部国語推行委員会  
1994 『國語辞典』中華民国教育部版
- 船山徹  
2014 『仏典はどう漢訳されたのか—ストラが経典になるとき』岩波書店
- 松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳  
2002 『大乘仏典 法華経 II』（中公文庫）中央公論社

(はく けいこう、広島大学大学院 [インド哲学])



The Story of the Dragon Princess in the *Zheng fa hua jing* by Zhu Fahu

Jinghao Bai

The story of the Dragon Princess 龍女, which appears in the “Devadatta 提婆達多” chapter of the *Saddharmapuṇḍarikasūtra* that corresponds to Chapter 12 of its Chinese version by Kumārajīva, is well known as depicting an eight-year-old daughter of the nāga (dragon) king Sāgara who, never swerving from the path of enlightenment, manifests herself as a male bodhisattva to attain Buddhahood. Of this story there are four Chinese translations: the *Sa tan fen tuo li jing* 薩曇分陀利經 by an unknown translator, the *Zheng fa hua jing* 正法華經 by Zhu Fahu 竺法護 (\*Dharmarakṣa), the *Miao fa lian hua jing* 妙法蓮華經 by Kumārajīva, and the *Tian pin miao fa lian hua jing* 添品妙法蓮華經 by Jñānagupta and Dharmagupta. The Chinese translation of the story by 法意 (\*Dharmamati) was later incorporated into the *Miao fa lian hua jing* 妙法蓮華經.

The present paper aims at providing a Japanese translation of the Chinese version of the story in the *Zheng fa hua jing* 正法華經 by Zhu Fahu. Zhu Fahu, who translated the sūtra into Chinese in 286 CE, was the first to introduce the One Vehicle doctrine into China. It is commonly accepted that the *Zheng fa hua jing* 正法華經 is difficult to read and understand because at the time when Zhu Fahu undertook to make a Chinese translation of the sūtra Chinese Buddhist terms had not been established.

Biographies of Zhu Fahu and historical materials referring to him comment that his translation is plain and artless in comparison to Kumārajīva's. Kawano 2007 has already pointed out that Zhu Fahu's translation has the following characteristics:

1. The same word or phrase is differently rendered;
2. Phrases consisting of four characters tend to be used;
3. Words are coined with synonyms;
4. Supplementary expressions are used;
5. A one-to-one correspondence between Sanskrit words and their nonliteral translations;
6. Unintelligible doctrinal passages are not translated.

In addition to these, we may point out that inversion is in frequent use (7). Instances pertaining to the characteristics found in the story in the *Zheng fa hua jing* 正法華經 are as follows:

1. 得仏, 成仏, 成正覺, 成最正覺;
2. 在於海中惟但敷演正法華經;
3. 惟但, 倉卒, 弘廣, 聰明;
4. 怪未曾有;
7. 歷劫難計、佛不可得、功積顯著.